

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(五)

植 木 久 行

●一六八番 白居易「楊尙書の『相を罷めて後、夏日 永安の水亭に遊び、兼ねて本曹の楊侍郎を招いて同に行く』に和す」「竹亭陰合偏宜夏、水鑑風涼不待秋」

○開成五年(八四〇)の夏、作者六九歳、洛陽での作(花房・朱・王・羅)。太子少傅分司在任。楊尙書とは吏部尙書の楊嗣復(字繼之、七八四年生)、また楊侍郎とは吏部侍郎の楊汝土(字慕巢、白居易の妻の兄で、白居易よりも六、七歳年下の親友)を指す。本曹とは自分の所屬する官曹(官廳の部局)をいう。二人はともに尙書省吏部に在職していたからである。楊嗣復は本年(開成五年)二月六日、門下侍郎同平章事(宰相)となり、吏部尙書を兼任したが、三か月後の五月四日には早くも宰相職を解任された(吏部尙書はそのまま在任)。詳しくは、嚴耕望『唐僕尙丞郎表』卷九、吏尙の條(五二〇頁)や羅『年

譜』など参照。したがって「相を罷めて後」の「夏日」とは、本年の五月四日以降、六月の末までの間を指す。

ところで楊嗣復の宰相解任は、じつは皇帝の交替による政情の變化と密接に關連する。本年の正月四日、文宗が病死すると、宦官の仇士良と魚弘志は勢力の擴大をめざして畫策する。彼らは、皇太子の成美(敬宗の第六子)を後繼者に指名した文宗の遺志を退け、宰相の李珣や楊嗣復らの反對を押しきって、文宗の弟、のちの武宗を即位させた(『資治通鑑』卷二四〇)。かくて楊嗣復らは、新たに即位した武宗一派の敵意を招いて宰相職を解かれ、代りに淮南から李德裕が呼ばれた(『舊唐書』卷一七六、楊嗣復傳)。本詩は、その解任を慰める意圖をもつ(王『系年』参照)。ちなみに、楊嗣復は牛僧孺・李宗閔一派の重要なメンバーの一人であり、李德裕一派

と鋭く對立する(1)いわゆる牛李の黨争)。

○「永安水亭」 都長安城内の西南部、永安坊にあった楊嗣復の別邸(別莊)を指す。この「亭」は、園亭をそなえた亭館・別邸を意味する廣義の用法。孟浩然の「陳大の水亭に過る」詩は、一に「夏日 舟を浮かべて陳逸人の別業に過る」と題する(2)。吉川幸次郎『杜甫詩注』第二册(筑摩書房、一九七九年)は、「重ねて鄭氏の東亭に題す」詩に對して、「亭」は和語の小さな亭ではない。和語で寮というほどの規模にあらう」という。

ところで、楊嗣復の水亭のある永安坊の西端部には、終南山から流れ出る清流を引き入れた永安渠が北流していた。永安渠は、唐の長安城の前身、隋の大興城建設とともに、開皇三年(五八三)に造られ、「交水(5)を導き、大安坊の西街より(長安)城(内)に入り、北流して(宮)苑に入り、渭(水)に注ぐ(6)、柳のしだれる御水であった。郭聲波「隋唐長安的水利」によれば、こうした水渠は、主に園林の用水(園池への給水)と生活用水(特に洗い物)とに用いられていたという。都城内の庭園の基本は、苑池の開鑿と築山(假山)の建造であり、竹や木々を植えて自然の風趣を再現しようとしたが、その際、清流や水池が特に重視された。村上嘉實「唐代貴族

の庭園(9)」によれば、池を中心とする池館臺樹式の庭園は、貴族のなかでも特に榮華をきわめた人々が多く造る都會型の庭園であり、「自然美を取入れながら、なほ人工において勝つてゐたものが多いやうである」と指摘する。

永安坊のある都城内西南部は、じつは住民の少ない閑散とした「園外(10)」の地である。妹尾達彦「唐代長安の街西」は、この付近の環境を次のごとくいう。

唐代中期以降の街東官僚街の形成に伴い、街東萬年縣の西側に住む高官たちは、水に恵まれて閑静な街西中南部の清明渠・永安渠沿いに、渠水を利用した庭園をもつ別宅を、相次いで建築していった。

街西中南部は、皇城の南を東西にのびる交通幹線や市場からも離れていたため、唐代中期でも、比較的閑地であった。街西の緑濃い水渠沿いのこれらの閑坊に、唐代後半期に至ると、街東の高官の別莊の建設が續き、その庭園には、樹木・草花・石組・池亭を配し、水禽が集い彩船が浮かび、城内においてなお山岳溪谷の趣きを備えていたのである。官人達は、ここに寄って、長安の暑氣を避け、宴會を開いては交流を深め合った。

楊嗣復の水亭は、詩の内容によれば、「高欄ありて水に臨

み、且つ竹林ありて之を繞れる」(柿村『考證』) 池館である。この形態は、昭行坊にある王昕の池園が、同じ「永安渠を引いて池を爲り、彌亘頃畝、竹・木環布し、荷・荇叢秀す」(宋敏求『長安志』卷十)るさまを思わせる。楊嗣復の本宅は、前掲の妹尾論文の表1では「不明」とするが、おそらくその父親の楊於陵(七五三—八三〇)の住んでいた新昌坊の邸宅にそのまま住み續けていたと考えてよいだろう。この「永安の水亭」も、じつは父親の別邸をゆずり受けたものである。長慶二年(八二二)の二月(一説に正月)に成る韓愈の「早春、張十八博士籍と楊尙書(於陵)の林亭に遊び、第三閣老(第三廳の中書舍人楊嗣復)に寄せ、兼ねて白(居易)・馮(宿)の二閣老に呈す」詩には、

牆下の春渠 禁溝(宮苑を貫く渠水、永安渠)に入る
渠氷初めて破れて 渠に満ちて浮かぶ

云々と歌われている。これに唱和した白居易の同年の作、「韓侍郎(愈)の、楊舍人(嗣復)の林池に題して寄せらるるに和す」という詩(卷19)も傳わる。二詩の林亭・林池は、いずれも前掲の妹尾論文の注⑧にすでに指摘されるごとく、十八年後に成る本詩の「永安の水亭」の前身を指すと考えてよい(本詩の作成當時、楊於陵はすでに死没)。つまり、水亭は林

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(四)(植木)

亭・林池などとも呼ばれ、詩中の「竹亭」もこれらと類似する表現である。永安の水亭は要するに、永安渠の清流を引き入れた池を中心とした、竹林の茂る亭館・別邸であった。ちなみに、朱『箋校』に、「卽浙江西道觀察使薛平家廟水亭」云々とあるが、これは輕卒な誤り。薛平の家廟と水亭とは、全く無關係である。

他方、楊汝士は、楊嗣復の住む新昌坊の北隣に位置する靖(一作恭)坊の私邸に、弟の魯士や従父兄弟とされる楊虞卿・漢公と同居し、「靖恭の楊家」と呼ばれた(『唐兩京城坊考』卷三)。北宋の歐陽脩「諫義大夫楊公墓誌銘」には、

大和(八二七—三五)・開成(八三六—四〇)の間、(楊)汝士と曰ふ者、虞卿・魯士・漢公と、又た名を以て唐に顯はし、靖恭坊に居る。楊氏の者は、大だその族なるを以て著はる。

という。

○「竹亭」 竹林にかこまれた亭館・別邸。『抄注』には「竹林ノホトリナル家」という。韋應物の詩(『夜對流螢作』)に、「月暗くして竹亭幽なり」とある。竹は本来、桂樹や蓮の花、橘などとともに、南方の愛すべき植物であるが、唐代、竹の風趣が特に好まれて、北の都長安でも慈恩寺の鬱蒼

として綠濃き竹林を始めとして、寺院や私邸に多く植えられていた。⁽²⁰⁾

○〔陰合〕『抄注』に「竹葉モ、夏ハ新ニシケルモノナレハ、ソノカケノ、ヒマモナク、シケリアヘル意」という。別の白詩（既出の一五二番）に「綠槐 陰合して 沙堤平らかなり」という。「合」字は、重なる、集まる意。

○〔偏宜夏〕偏は、ここでは限定（範圍）というよりはむしろ、程度を表す副詞。最も、とりわけ、特に、などの意。

王鏐『詩詞曲語辭例釋』（増訂本）一八一頁以下、太田辰夫『中國語史通考』六三頁など参照。「宜夏」は、「ナツノスミカニカナヘリ」（『抄注』）の意。李白の詩（『送友人尋越中山水』）に、「聞道く（會）稽山に去ると、偏へに宜し 謝客（謝靈運）の才に」（王琦注本卷16）とある。

○〔水檻風涼〕水檻は「水亭の欄干」（佐久注）。杜甫の詩（『江上值水如海勢、聊短述』）に、「新たに水檻を添へて垂釣に供す」とあり、津阪孝綽『杜律集解』巻中には、「檻は柵なり。水際に於てこれを爲る。故に水鑑と曰ふ」と注する。前掲の孟浩然の詩（『過陳大水亭』）に「水亭 涼氣多し」とあり、白詩（『湖亭與行簡宿』卷17）にも「水檻虚涼にして風月好し」という。

●一七一番 白居易「西湖より晩に歸りて、孤山寺を迴望して諸客に贈る」 「盧橘子低山雨重、枳蠟葉戰水風涼」

○長慶三年（八三三）、作者五二歳、杭州での作（花房・朱）。

杭州刺史在任。西湖は、杭州城の西郊にある著名な景勝地。

「山川秀麗にして、唐（特に中唐）より以來、勝賞の處と爲る」

（『太平寰宇記』卷93） ったが、唐代の通稱は錢塘湖。白居易は

「錢塘湖石記」（卷68）のなかで、「錢塘湖、一に上湖と名づく。周迴三十里」云々とのみ記し、「錢塘湖春行」詩（卷20、

後集卷5）などの名作も傳わる。現存文獻によれば、この湖を

初めて西湖と呼んだ詩人は、ほかならぬ白居易自身であるらしい。⁽²¹⁾ その六例（『索引』）のうち、本詩の作成が最も早く、

翌年（長慶四年）の四例がこれに續く。清の方東樹が『昭味詹言』

卷十八で、「此の題、已に畫けるがごとし」と評した本詩の詩題は、この意味からも改めて注目されてよい。南宋の

施諤『淳祐臨安志』卷十、西湖の條にいう。

郡の西に在り。舊と錢塘湖と名づく。源は武林泉に出

で、周迴三十里、澄波 山を浮かべ、自から相ひ映發す。

清華盛麗にして、模寫すべからず。朝暮・四時、疑ふらく

は、天下の景物、此に于いて獨り聚まるがごとし。

云々と。拙著『唐詩の風土』一七〇頁以下参照。

○「孤山寺」 孤山にある永福寺の通稱。本詩の一年後（長慶四年四月）に成る元稹の「永福寺石壁法華經記」（『元稹集』巻51）にいう、

永福寺は、一に孤山寺と名づく。杭州の錢塘湖心の孤山の上に在り。

と。孤山は、湖中の西北部にそびえたつ島で、高さは三十八メートル。ただし、孤山寺路（白沙堤。今の白堤。この北端部に斷橋がある）と西林橋（西冷橋）によって湖岸とつながる。白居易は、この松の島に咲く梅の花や山石榴の花も好んだ。前掲の『淳祐臨安志』巻八、孤山の條に、

湖中獨立一峰。圓法師銘曰、「群山四絶、秀出波心」……自唐以來、題詠特甚。

この孤山寺は、宋代、廣化寺⁽²³⁾（院）と呼ばれた。『咸淳臨安志』巻七九、廣化院の條に、「天嘉元年（五六〇）建て、永福と名づく」とあり、同條の辟支佛骨塔の割注には、より詳しくいう、

陳の文帝の天嘉元年、天竺の僧有りて、辟支佛の領の骨の舍利を持ちて杭（州）に至り、遂に孤山に於いて永福寺を建て、塔を立つ。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(五)（植木）

云々と。ところが、同書卷二三、孤山、柏堂の條には、「陳の文帝の元嘉二年、廣化寺を建つ。寺に當時植へし所の二柏有り」とあり、永福寺の創建を一年遅い天嘉二年のこととする。『咸淳臨安志』よりも先に成る『淳祐臨安志』巻八、古蹟、柏堂の條にも、「陳文帝天嘉二年、建廣化寺」という。元と二の兩字は流傳の過程で誤りを生じやすい。平岡武夫「白樂天と臨安志—寺院を中心として—」⁽²⁴⁾は、「天嘉二年に建立された舊刹」との美しい、文字の異同に關する言及はない。明の田汝成『西湖遊覽志』巻二、廣化寺の條には、その創建を「陳の天嘉の初め」とする。白居易は、寺の背後にある、竹林にかこまれた小樓「竹閣」に宿泊して詩を作っている（「宿竹閣」巻20）。

○「迴望・諸客」 迴望は回望と同じく、ふり返って遠望する意。諸客は、一緒に孤山寺に遊んだ人々。呂小薇・孫小昭選注『西湖詩詞』（上海古籍出版社・中國名勝古蹟詩詞叢書、一九八二年）には、特に「隨從的幕僚們」と注する。

○「創作の背景」 顧學頡・周汝昌『白居易詩選』には、本詩作成の動機を次のように推測する。

長慶二年の夏、杭州の龍興寺の僧、南操は法會を行ない、靈隱寺の僧、道峰に『華嚴經』を講釋してもらった。

以後、毎年數回行なつた(『白氏文集』卷68、「華嚴經社石記」)。詩意によれば、きつと作者が法會に参加したのち、夕ぐれに歸るときのであらう。長慶三年か四年の夏の作。

と。梁鑑江『白居易詩選』(廣東人民出版社、一九八六年)や栗斯『唐詩故事』第四集(地質出版社、一九八三年)なども、本詩の作成を南操主宰の法會と關連づけ、なかでも前者は、「作者はかつてその法會を聴きに行ったことがある」とまでいう。しかし、これらの説は、みな牽強付會であらう。というのは、白居易の「華嚴經社石記」には、

予、前に杭州に牧たりし時、(南)操、是の願を發せしを聞く。

云々とのみあり、作者が南操主宰の法會に直接參加した形跡はない。ただ本詩の第二句に「晩に歸橈(歸り舟)を動かして道場(寺院・佛殿)を出づ」と歌うところから、單なる物見遊山ではなく、孤山寺の法會に参加した可能性が高い(王汝弼『白居易選集』など)。

○「作詩の季節」『千載佳句』は本詩を秋興に收め、さらに『抄注』にも「湖寺秋興ヲ賦セリ」という(『六注』もほぼ同じ)。孤山寺を湖寺と呼ぶ例は、白居易の「杭州春望」詩(卷20、後集卷5)のなかに見える。中國でも、清の王堯衢

『古唐詩合解』卷下や近年の『歷代四季風景詩三百首』(同書選注組編、北京師範大學出版社、一九八三年)なども秋の作とする。しかし、後述の「盧橘夏熟」の典故によれば、『和漢朗詠集』が本詩を夏の部に改めた處置のほうが穩當であらう。前掲の顧・周『白居易詩選』や『隋唐名郡杭州』(一九〇頁)、傅經順「未能拋得杭州去、一半勾留是此湖」(『唐代文學論叢』一九八二年第一期)なども夏景と見なし、後者は特に六月の作とする。もともと白詩の「江果は盧橘を嘗む」の句(後引)は、明らかに秋の作である。

○「盧橘」中唐の錢起の詩(送武進韋明府)にも、「盧橘殘雨に垂る」などと歌われているが、具體的にどんな果物を指すかは、きわめて難解である。しかもその解釋は、時代や地域、ひいては各詩人間においてさえも、微妙な異同があるらしい。いちおう、本詩に限定すれば、(1)柑橘類、(2)枇杷、の二説に分かれる。(1)の柑橘類は、さらに④給客橙、⑤金柑、⑥金橘、⑦夏蜜柑に分かれるが、明の李時珍『本草綱目』卷三十の説(後述)によれば、④⑤⑥はいずれも⑦の金橘(和名はキンカン)の二類に屬している。とすれば、(1)の柑橘類の説は、金橘と夏蜜柑の二つに分類することが可能である。ちなみに、夏蜜柑説は江見・金子『新釋』や柿村『考

證』以下、『和漢朗詠集』の近年の譯注書類に共通する考え方であるが、中國の譯注書には見えない。なお(2)の枇杷説は、王榮初選注『西湖詩詞選』（浙江人民出版社、一九八〇年）や前掲の呂・孫『西湖詩詞』、王遂今『白居易與杭州』（浙江人民出版社・浙江歷史小叢書、一九八六年）など、杭州を特集した書物に多い。

ここで、白詩の他の用例をすべてあげ、若干検討しておきたい。

①「江果は盧橘を嘗め（味わい）、山歌は竹枝（民歌の名）を聴く」（『江樓偶宴、同座に贈る』、卷15、元和十年〔八一五〕、都長安から江州へ左遷される途中での作）。

②「果を見れば皆な盧橘、禽を聞けば悉く鷓鴣」（『東南行一百韻』、卷16、元和十二年〔八一七〕、江州での作）。

③「肉は盧橘の厚きを嫌ひ、皮は荔枝の皴むを笑ふ」（『沈〔傳師〕・楊〔嗣復〕の二〔中書〕舍人閣老と共に勅賜の櫻桃を食し、物を翫びて恩に感じ、因りて十四韻を成す』、卷19、長慶二年〔八二三〕、都長安での作）。

このうち、早期の①と②、特に②によれば、盧橘は温暖濕潤な長江ぞい、特に江州（江西省九江市）付近に多く生育する果樹であり、南方特有の異様な風土を表すものの一つとし

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(四)（植木）

て認識されている。江州に多いという点からいえば、歐陽脩『歸田錄』卷二に、

金橘は江西に産す。遠く致び難きを以て、都の人は初めより識らず。

の語が思い起こされる。篠田統『唐詩植物釋』（『中國食物史の研究』所收）盧橘の條には、キンカンとビワの兩説を検討する。まず戴叔倫の著名な「湘南即時」詩（『三體詩』卷一）の「盧橘華開楓葉衰」と白居易の本詩をとりあげ、

晩秋に花がひらき梅雨ごろに實が重い果物は、たとい橘の名がついてはいても、ミカンのたぐいではなく、ビワとみるほうが自然だろう。

と述べる。ひき續いて、前掲の白詩③の「肉は盧橘の厚きを嫌ふ」に着目して、「櫻桃よりも肉が厚いというので、これまたビワに軍配があがる」とし、「かりにミカン類としてもナツミカンにちかいかいもので、キンカンではなさそうだ」という。

○「盧橘夏熟考」盧橘の解釋が今日もなお紛糾するのは、それが本来、謎にみちた奇怪な珍果であったことと關連する。盧橘といえ、前漢の司馬相如「上林賦」の、

盧橘夏熟^{一作}、黃甘橙棗、枇杷糝柿、

云々という言葉が、まず思い起こされる。⁽³⁰⁾この句に對して、後漢の應劭は、『伊尹書』⁽³¹⁾を引いて、

果之美者、箕山之東、青鳥之所、有盧橘、夏孰。

という〔史記〕司馬相如傳の『索隱』所引。孰は熟の本字。

これとよく似た文章は、じつは『呂氏春秋』卷十四、本味篇にも見える。殷の賢人、伊尹が湯王に對して、各地の水陸の奇異な珍果を列擧した條に、

果之美者、……箕山之東、青鳥鳥一作鳥之所、有甘櫨焉。

とあるのが、それである。『山海經』卷十五、大荒南經によれば、甘櫨は「白華、黑實」の果物らしい。⁽³²⁾というのは、盧橘の盧は一般に「黒色也」〔漢書〕司馬相如傳の顔師古注、

「黒也」〔文選〕李善注の意とされ、盧橘はまた櫨橘とも書かれるからである。要するに、司馬相如の賦の「盧橘夏

熟」の語は、「異方の珍果」〔李善注などに引く晋灼の語〕の一つとして、荒唐無稽な小説『伊尹説』などにもとづいて書き入れられたものであり、司馬相如自身も、盧橘の正體をよく知っていたとは限らない。

また、司馬相如が盧橘を枇杷と考えていたならば、「盧橘夏熟、……枇杷、燃柿」云々と並列させるはずはないともい⁽³³⁾う。しかしこの指摘も、事物の敷陳を特色とする賦中の文學

的表現であつてみれば、「恐らくは一物に非ざらん」〔朱翌『猗寮雜記』卷上〕という程度の信憑性しかもたない。北宋の唐庚⁽³⁴⁾などは、「李氏山園記」⁽³⁵⁾のなかで、賦中の盧橘と枇杷との關係を、一物を二物とした例だと指摘する。かくて、謎にみちた盧橘に對して、一方では文字づらから「盧橘」を求めつつ、他方では「夏熟」の語に着目して「後世遂に多く枇杷と爲す」〔清の張雲傲『選學彞言』卷5〕結果になつたわけである。

しかも盧橘の解釋が、時代や地域、あるいは個人間において、微妙に異なるので、問題は一層複雑である。宋の朱翌『猗寮雜記』卷上には、

嶺外（今の廣東・廣西地方）では、枇杷のことを「盧橘子」と呼ぶ。蘇軾や唐庚は盧橘と枇杷を同一視するが、これはただ、左遷された嶺外の地での呼稱に従つたものにすぎない。

という（大意）。他方、繆啓愉校釋・繆桂龍參校『齊民要術校釋』（農業出版社、一九八二年）卷十の橙・橘の注（五七八・五八〇頁）に、

漢・晋の盧橘は、じつはみな金柑屬（Fortunella）の一種であり、唐・宋以後に指す枇杷ではない。

という(要約)。しかし、唐代でも錢起の詩に「親を思ひて

盧橘熟す」というのは、明らかに「陸續懷橘」の典故を踏まえており、枇杷ではない。ただ唐・宋期の用例のなかには、

「冬に花さき、夏に熟す」(『廣韻』上平・脂第六、枇の條)る枇杷を意味する用例があるのも事實である。枇杷を指すと考えた場合、「枇杷は熟すれば則ち黄。應に慮と云ふべからず」(朱翌の前掲書)と反論されがちであるが、明の李時珍『本草綱目』卷三十、金橘の條には、異名として金柑・盧橘・夏橘

・山橘・給客橙をあげて、次のように説明する。
此の橘は、生る時、青盧色(黒ずんだ色)にして、黃熟すれば則ち金のごとし。故に金橘・盧橘の名有り。

ちなみに、唐代の詩文には、盧橘の花を詠んだ例も散見する。高步瀛『文選李注義疏』卷八は、盧橘に關する資料を丹念に集めており、参照に値する。

○「子低」杜甫の詩(『陪鄭廣文遊何將軍山林十首』其二)に、「卑ひくき枝 低れて子を結ぶ」とあり、森槐南『杜詩講義』上卷(文會堂書店、一九一九年)には、低の字を「實の重さで更にそれが下へ垂れる、裊しなふといふ意味」だとする(六一頁)。

○「山雨重」山雨は「山チカクフル雨」(『抄注』)。梅雨とも立ちちともとれよう。『西湖遊覽志』卷一、西湖總叙に

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(五)(植木)

「三面に山を環らす」とある。つまり、この山は、西湖の東側を除く三方の山々をいう。「重」字は、下句の「戰」字とともに、本詩の字眼である。『御選唐宋詩醇』卷二五には、

重の字、戰の字、……俱に下し得て警拔、遂に全首(一首全體)の生動するを覺ゆ。故に曰ふ、「句を鍊るに如かず」と。

と評する。枝もたわわに實をつけた湖岸の盧橘。その熟れた實の一つ一つが山の雨にぬれそぼり、夕日のなかで一層重たげに枝をしなわせている光景である。中唐の張謂の詩(郡南亭子宴)の「柳枝 雨を経て重し」や、晚唐の許渾の詩(送張尊師歸洞庭)の「簷に傍ふ山果 雨來低る」などと比較して味わいたい。

○「併欄」シュロの木(『六注』)。シュロは、ヤシ科の常緑高木。圓柱狀の幹には枝がなく、上部に柄の長い掌狀の葉を叢出する。『藝文類聚』卷八九、并閭に引く『廣志』(郭義恭撰)には、「葉は車輪に似たり」と形容する。舊曆六、七月初、黄白色の粟つぶのような花が穗狀に垂れる。併欄はまた、并閭・併欄とも書く。併欄の字は、すでに『說文解字』卷六上、併・櫻の條や、張衡の「南都賦」(『文選』卷4)、左思の「吳都賦」(『文選』卷5)などに見え、段玉裁『說文解字

注〕六篇上には、「許書〔説文解字〕には栢有れども欄無し。欄は栢の木旁に因りて、これを同じうするのみ」という。シユロはまた、櫻・櫻欄・棕欄とも書く。詳しくは、狩谷掖齋『箋注倭名類聚抄』巻十や吳其濬〔ごきしゆん〕『植物名實圖考長編』巻二一の櫻欄の條参照。

○〔葉戰〕戦は、ブルブルとふるえてやまないさま。白詩「生離別」(巻12)にも「棠梨 葉戰いで風颺とよ」とある。この用法は、『戰國策』巻十七、楚策四の「身體戰慄こころおそす」と関連しよう。「顛」の假借義。清の王堯衢は、「亂葉交々こころおそ相ひ動くなり」(『古唐詩合解』巻下)と注する。戦は本句の字眼(前述)。湖面を吹きわたる雨後の風の爽やかさと涼しさ。それを充分堪能するシユロ自身の姿も思い浮かぶようである。⁽⁴⁰⁾

○〔水風涼〕水風は「湖上を吹き来る風」(柿村『考證』)。梁の庾肩吾の詩(和晋安王薄晚逐涼北樓回望應教詩)に、「窓には含む 水を度わたる風」とある。

〔注〕

- (1) 花房英樹『白居易研究』八二頁、ウェーリー著、花房譯『白樂天』四二八頁以下参照。
 (2) 白居易の中立的な態度については、顧學頡「白居易與牛・

李兩黨關係考」(『顧學頡文學論集』中國社會科學出版社、一九八七年所收) 参照。

(3) 曹永東『孟浩然詩集箋注』(天津古籍出版社、一九九〇年) 巻二など参照。

(4) 『長安志』巻十、大安坊の永安渠の條や、元の駱天驥『類編長安志』巻六香積渠の條など参照。特にそのルートについては、黃盛璋「西安城市發展中的給水問題以及今後水源的利用與開發」(同『歷史地理論集』人民出版社、一九八二年所收)や、馬正林「豐鎬—長安—西安」(陝西人民出版社、一九七八年)等参照。

(5) 浚水とも書き、今の鄆河にあたる。

(6) 宋の程大昌『雍錄』巻六、唐都城導水。もと呂大防の長安城圖の題記中の言葉らしい。宋の趙彥衛『雲麓漫鈔』巻八参照。

(7) 趙毅「宿何書記先輩延福新居」詩。

(8) 史念海主編『唐史論叢』三秦出版社、一九八八年所收。

(9) 『東方學』第十一輯、一九五五年。

(10) 武伯倫『古城集』(三秦出版社、一九八七年)「古城拾零」(三)「圍外」の條参照。

(11) 北海道教育大學史學會『史流』二五號、一九八四年所收。ちなみに、長安城内の東半分を街東、西半分を街西と呼ぶ。

(12) 『唐兩京城坊考』巻三、新昌坊の條や、朱金城『白居易交游三考』(同『白居易研究』所收)の楊嗣復の條参照。

- (13) 陳忠凱・楊希義「唐長安城坊里宅第變遷原因初探」(《文博》一九九一年四期)に記す十の原因のうち第一、「世襲宅第」にあたろう。
- (14) 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』卷十二參照。正月説は久保天隨『韓退之詩集』下卷(續國譯漢文大成)の説。
- (15) 楊於陵は元和十五年から長慶二年閏十月まで戸部尚書に在任。嚴耕望『唐僕尚丞郎表』參照。
- (16) 一説に、第三は楊嗣復の排行とする。岑仲勉『唐人行第錄』參照。
- (17) 平岡武夫「白居易とその妻」(《東方學報》京都・第三六冊、一九六四年)や羅『年譜』八頁など參照。ただし、『千唐誌齋藏誌』一〇二一番の「楊府君(靈)墓誌銘并序」には、「有子四人。汝士・虞卿・漢公、咸著名實、幼曰殷士」とあり、楊汝士と虞卿は兄弟であるとする。これは、白居易が詩中で二人を「兄弟」と呼ぶことと關連して興味深い(堤留吉「白樂天研究」一六七頁參照)。ちなみに、このほか、楊虞卿一族の墓誌が『千唐誌齋藏誌』一一九七・一一九八・一一五五番などに收められている。いずれも靖恭坊で没し、洛陽の北邙山に葬られた。
- (18) 四部叢刊『歐陽文忠公集』卷六一、外集第十一所收。
- (19) 補訂稿四、一五一番參照。
- (20) 拙稿「唐都青龍寺詩初探」(平河出版社刊『道教と宗教文化』、一九八七年所收)參照。
- 『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)
- (21) 周峰主編『隋唐名郡杭州』一一四頁。
- (22) 南宋の潛説友『咸淳臨安志』卷23も參照。
- (23) 廣化寺の名稱は、唐末の大中年間以後か。『咸淳臨安志』卷七九、廣化院の條參照。
- (24) 『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』一九六一年所收。
- (25) 孤山寺は南宋の初めに移轉させられた。これは、南宋の王室が道教を尊崇して、孤山に四聖延祥觀を建てたからである。竺沙雅章「宋元時代の杭州寺院と慈恩宗」(梅原郁編『中國近世の都市と文化』一九八四年所收)參照。ただ竹閣のみは、西冷印社の社址に古跡として残るといふ。王遂今『白居易與杭州』六九頁參照。
- (26) 『咸淳臨安志』卷八五、昌化縣、千頃山龍興寺の條に、「在縣西北六十里。元和間、黃蘗禪師開山」とある。杭州市の西方約一〇〇キロの地である。
- (27) ④は顧・周及び梁鑑江の『白居易詩選』、⑤は内田泉之助『白氏文集』(明德出版社)、『歴代四季風景詩三百首』、岡村繁『白氏文集』四、⑥は栗斯『唐詩故事』第四集など。
- (28) 佐久注も枇杷説。
- (29) 『文選』卷八、『史記』卷二七、司馬相如傳、『漢書』卷五七上、司馬相如傳などに所收。
- (30) 『(宋本)白氏六帖事類集』(傳增湘舊藏本)卷三十、雜果第五には、「夏熟」の項目があり、「盧橘」と注されている。
- (31) 『漢書』卷三十、藝文志、小説家類に著録する『伊尹説』

中國詩文論叢 第十一集

二十七篇のことらしい。陳奇猷『呂氏春秋校釋』卷十四（學林出版社、一九八四年）七四二頁の注(1)参照。

(32) 『山海經』の本文では、甘櫨を「甘祖」に作るが、前注の陳奇猷の説によれば、甘祖（甘櫨）は甘櫨の妄改らしい。

(33) 『說文解字』卷六上、櫨の條参照。清の桂馥『說文解字義證』卷十七に、櫨橘は盧橘に通じるとする。

(34) 宋の莫立方『韻語陽秋』卷十六、『選學膠言』卷五、陶宗儀『南村輟耕錄』卷二六など参照。

(35) 四部叢刊三編『眉山唐先生文集』卷九所收。宋の吳曾『能改齋漫錄』卷十五、盧橘の條にも引く。

(36) 『宋史』卷四四三の本傳参照。

(37) 「送陸贄擢第還蘇州」詩。大曆八年（七七三）夏の作。

(38) 懷橘は橘を懐中に入れる意。『三國志』卷五七、吳書第十二、陸績傳参照。『蒙求』卷上の標題にもなる。すでに『韻語陽秋』卷十六に指摘されている。

(39) 宋之問「登粵王臺」、許渾「別表兄軍倅」「病間寄郡中文士」、于邵「送崔判官赴容州序」など。古くは後漢の李尤「七款」に「盧橘是生、白華綠葉、扶疏冬榮」とある（『全漢文』卷五十）。

(40) 前掲の傳經順「未能拋得杭州去、一半勾留是此湖」参照。